

万葉集旧訓回顧

木 下 正 俊

はじめに

上代語から中古語への移り変わり、といえば問題が大き過ぎ、また私の能力も超え、関心も実はそのにないため、和歌だけに限って述べることにする。それも、万葉集の訓み方をなるべく当時の姿に復元しようと思う私がこの問題を取り上げるのも、後世の歪みが認められる通行訓を少しでも改めたい、と考えてのことである。

ただし、その通行訓というのも、さす所が極めてあいまい、とのそしりを免れず、例えば、寛永版本の右傍訓即ち狭義の旧訓だけに限るのか、それも仙覚の新点以前の古次点を対象に含めるべきか否か、など多少の疑問は残る。しかし、今は主として代匠記以下の近世の諸注が試み、そして今日の大半の注釈書が従っている訓を主にさす、という扱いで話を進めよう。

結論から言えば、それらの中に採るべきものは勿論数々あるが、案外に、旧訓（広義の）の中で諸注に顧みられていないものに再考の余地があるものがあり、それも語法に関するものを中心として、幾つか考えた所を取り上げてみたい。

一

巻第七の繩旅作中の紀伊国関係の歌が幾つか並んでいる中の一首に次の歌がある。

足代^{あて}過ぎて糸鹿^{いとが}の山の桜花^{やうなすず}不散在^{ふち}南還り来るまで（二二二二、

原文のままに示した部分は寛永版本の本文及びその右傍訓、以下も同じ）

この「チラズモアラナム」は、旧訓のみならず類冷紀などの全古写本の訓である。更に言えば、夫木抄・歌枕名寄などの抄出本も亦同

様である。この中のモを抜いて「テラズアラナム」としたのは万葉考である。ただし、それに関する理由説明はない。それ以後略解以下の大部分の注書がこれに従った。私たちの稿本・日本古典文学全集でも例外でない。それを旧訓以前の姿に選したのは桜楓社版万葉本で私たちがモを入れた。

結論を言えば、桜楓社版の判断が正しい。このように希求表現にモが伴い易いことについては佐伯梅友博士が論文「『も』の或る場合」の中で

海つ道のなきなむ時も渡らなむ (9・一七八一)

などを例として述べられ、ナムのみならず、ヌカ(モ)でも同じような事実が認められることを指摘しておられる。尤も音数の制約のためにこの種のモが割り込めないことがある。

万葉集にはただしこのような「ズ(モ)アラナム」という例がたまたまないが、中古以降の和歌には次のようなものがある。

恋々て逢ふ夜はこよひ天の川霧立ち渡りあけずもあらなむ

(古今 一七六)

恋々てまれにこよひぞ逢坂の木綿つけ鳥は鳴かずもあらなむ

(同 六三四)

吹く風に散らずもあらなん梅の花わがかり衣ひとよやどさん

秋の夜の心もしるく七夕のあへるこよひは明けずもあらなん (後撰 二五)

あだ人のたむけに折れる桜花逢坂までは散らずもあらなん (同 二三五)

よとともに散らずもあらなん桜花あかぬ心はいつか絶ゆべき (同 一三〇六)

日にそへてうき事のみもまさるかなくれてはやがてあけずもあらなん (後拾遺 一三三)

春の野に心やらむと思ふどち出で来し今日は暮れずもあらなん (同 八〇六)

花ならぬ慰めもなき山里に桜はしばし散らずもあらなん (玉葉 一一五)

飽かなくにまだきも月の隠るるか山のはにげて入れずもあらなん (同 二二九)

(伊勢物語八十二段)

ここに挙げたのはたまたま私の見得た例であるが、その反証となる形を知らない。あるいは、この原文「不散在南」に助詞モの表記がないことを理由に斥けられる向きもあるかも知れない。しかし不詠字、裏返せば詠添についてはまだよく分らないところがあり、このモに関して、以前私は「美麗物何所不飽矣」(三八二一)の第

二句にモを入れて「イツクモアカシヨ」と読むべきことを述べたことがある。殊にこの場合、近世以降の訓であるが、希求表現に副うそれについては、次の如きが傍証となろう

青角髪依網原に人相鴨石走る淡海県の物語りせむ

(7・一二八七)

敷細の枕助きて眠寝らえず物思ふ今宵急明鴨

(11・二五九三)

現在では、前者で略解に引く宜長説の「ヒトモアハヌカモ」、後者で略解が「ハヤマアケヌカモ」と読んだのが行われ、それが正しかろう。共にモが補読されている。

二

冬ごもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 咲かざりし 花も咲けれど 山を茂み 入りても取らず 草深み 取りても見ず 秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば 取りてそし のふ 青きをば 置きてそ嘆く そこし恨めし 秋山吾者

(1・一六)

この歌の最後の句「秋山吾者」は、今日大抵の注釈書に「アキヤマワレハ」と読まれている。間にソを讀み添えて「アキヤマソアレハ」とするものは、最近では堀本・全集本・完訳本そして新潮社の

集成本だけである。

古写本について見れば、元暦校本(緒)に「アキヤマワレハ」と読んでいるのはこの際除外するとして、「アキヤマワレハ」と読むものに冷古紀があり、「アキヤマソワレハ」は西陽矢京の仙覚文永本と紀州本の朱の書入訓(あるいは文永本系一本による校合書入か)である。神宮文庫本は紀と同じく「アキヤマワレハ」であるが、右に「ソ」を後補し(別筆か)、それに加筆して「ヨ」としてある。細井本はそれを受けたものか「アキヤマワレハ」の右傍訓を付している。寛永版本の訓は文永本のそれによったものであるが、その元が仙覚の発明によるものか否か明らかなでない。その部分訓を背で書いていないところを見るとソの可能性が大きい。それはともかくとして、代初はその訓を尊重して「昔」脱か、とし、真淵の考がそれに追隨した。更にそのソを抜いたのは宜長の玉の小琴で、「そを加へては中々におとれり」と言っている。

これに類する例を八代集に探したが、あとで触れるゾコレ形式の「神な月しぐれ降りおけるならばの名におふ宮のふるこそこれ」(古今九九七)の一首しか見付けることが出来なかった。これを除けば形はこれに似ながらゾを疑問に用いた例が一つあったきりである。あるいは見落ともあろう。しかしこのようにソ(ゾ)で結ぶ名詞文(この際文末にハあるがなければ問わない)を倒置形式にし

た形は万葉集に幾つかある。

うまし国そ」あきづ島大和の国は (1・二)

妻恋に鹿鳴かむ山そ」高野原の上 (1・八四)

帰り来む日相飲まむ酒そ」この豊御酒は (6・九七三)

老人の妻若つといふ水そ」名に負ふ滝の瀬 (6・一〇三四)

うらぐはし山そ」泣く子守る山 (13・三二二)

返り言奏さむ日に相飲まむ酒そ」この豊御酒は

(19・四二六四)

天地の堅めし国そ」大和島根は (20・四四八七)

この他に主格がコレという形のものがある。

里に下り来るむささびそ」これ (6・一〇二八)

菟会処女の奥つ城そ」これ (9・一八〇二)

山人の朕に得しめし山づとそ」これ (20・四二九三)

逆坂を今朝越え来れば山人の我にくれたる山杖ぞ」これ (神楽歌)

最後のはその前の歌の類歌である。この形で唯一の例外が葛城王の

茜さす昼は田賜びてぬばたまの夜の暇に摘める芹」これ (20・四四五五)

である。この音数の制約のためにソを入れられない最後の例に従って「秋山吾者」を「アキヤマワレハ」と読むというならば筋違いで

なからうか。これもまた旧訓に還るべき一つの例と言ってよからう。

三

何処^{イソノコウ}吾^{カウ}将^{カウ}宿^{カウ}高島^{カウ}の勝野^{カウ}の原^{カウ}にこの日暮^{カウ}れなば (3・二七五)

(3・二七五)

佐伯博士の論文「万葉集の助詞三種」の中で、文の主語がノ・ガを受ける場合の一つとして「係詞が上にある場合」というのが挙げられている。そのうちゾ・コンの係の場合についてはなお疑問があるが、ヤ・カ^(主)の係の場合には例外がほとんどない。博士の示された例は

ねもころに片思^イひ為^イ敷^イこの頃^イのわが僧^イ利^イ乃^イ生^イけりとも名^イ寸^イ

(11・二五二五)

白浪の浜松が枝の手向^イくさ幾代^イまでに賀^イ年^イ乃^イ経^イぬらむ

(1・三三四)

旅にあれど夜は灯^イともし居^イる我^イを闇^イに也^イ妹^イ我^イ恋^イひつつあるらむ

(15・三六六九)

であるが、この他にも、

倉橋^イの山^イを高^イみ可^イ夜^イ隠^イりに出^イて来^イる月^イ乃^イ光^イ之^イ寸^イ (3・二九〇)
何^イすと鹿^イ使^イ之^イ来^イ流^イ君^イをこそかにもか^イくにも待^イちかてにすれ

(4・六二九)

何時の間可霜乃降り家武…いづくゆ可飯何来り斯

(5・八〇四)

雲隠り行くへをなみと我が恋ふる月を哉君之。見まく欲り為流

(6・九八四)

潮満てば入りぬる磯の草なれ哉見らく少なく恋ふらく乃。太寸

(7・一三九四)

ほととぎす声聞く小野の秋風に萩咲きぬれ也声之。寸

(8・一四六八)

時待ちて落つるしぐれの雨止みぬ明けむ朝香山之。将黄変もみぢ

(8・一五五二)

葛城の豊津彦真弓荒木にも頼め也君之。我が名告りけむ

(11・二六三九)

今よりは逢はじとすれ也白妙の我が衣手之。干る時も奈吉

(12・二九五四)

草陰の荒蕪の埒の笠島を見つつ可君之。山道超良无

(12・三一九二)

などがその例である。それでも例外がなくもない。

今日も可母奥つ玉藻者。白浪の八重折るが上に乱れて将有

(7・一一六八)

先に挙げた「白浪の浜松が枝の」(三四)の二云に「年者経尔計武」とあるのも亦例外に数えてよいかも知れない。

しかしまず疑問の係助詞ヤ・カがあるとノ・ガが現れるという事実はほとんど原則といってよく、そして古今以後にもその傾向は受け継がれているようである。即ち、

(i) 係がカの場合

雪とのみ降るだにあるを桜花いかに散れとか風の吹くらん

(古今 八六)

いつまでか野辺に心のあくがれむ花し散らずは千代もへぬべし

(同 九六)

命だに心になふものならばなにか別れの。かなしからまし

(同 三八七)

あはれともうしとも物を思ふ時などか涙の。いとなかるらん

(同 八〇五)

うき世には門させりとも見えなくになどかわが身の。いでがてに

(同 九六四)

(ii) 係がヤの場合

春日野のわかなつみにや白たへの袖ふりはへて人の。ゆくらん

(古今 二二)

折りつれば袖こそほへ梅の花ありとやこここにうぐひすの。なく

(同 三二)

秋はぎの下葉色づく今よりやひとりある人のいねがてにする

(同 二二〇)

たえず行くあすかの川のよどみなば心あるとや人のおもはん

(同 七二〇)

風ふけばおきつしらなみたつた山よはにや君がひとりこゆらん

(同 九九四)

などが原則通りの例である。しかし一方に次のような例外もある。

いつはりと思ふものから今更にたがまことをか我はたのまむ

(古今 七二三)

河風のすずしくもあるかうちよする浪とともにや秋はたつらん

(同 一七〇)

ゆふづくよをぐらの山になく鹿のこゑのうちにや秋は暮るらん

(同 三二二)

流れ出づる方だに見えぬ涙がはおきひむ時やそこは知られん

(同 四六六)

野とならばうづらとなきて年はへんかりにだにやは君はこざらん

(同 九七二)

古今集では右の五首が例外のすべてで、これだけで傾向を断定することは危険であろうが、万葉から古今へと時代が下降するにつれ

て、しだいに例外が多くなりそうな予感がある。それも、単純な疑問のカよりも詠嘆の性格が濃いヤの場合にその傾向が強いかと思われる。このあと後撰集以降のことは、今それを確かめることが目的でないため省略し、ただ次のような反証例を挙げるにとどめておきたい。

玉江こぐ芦刈小舟さし分けてたれをたれとかわれば定めん

(後撰 一二五二)

山高みかすみを分けてちる花を雪とやよその人は見るらん

(同 九〇)

みるめかるかたぞあふみになしと聞く玉もをさへやあまはかつ

(同 七七三)

かぬ
このように係のヤ・カがあってもハで受ける例が多くなっていく

と、さきの万葉歌「何処吾將宿」を古今六帖に「いづくにかわれはやどらむ」という形で引いてあったとしても、不思議と咎めることはできなくなる。ただ、それら少数の例外を証拠に万葉集の歌の訓を決めることは不合理であろう。

なお、この場合「宿」の字をヤドルとのみ読まず、サ変に複合させてヤドリスと読んでよいのではないか。

何為むに命継ぎけむ吾妹子に不恋前死なましものを

(11・二三七七)

の第四句を「コヒザルサキニ」と読みはじめたのは略解だが、これも旧訓に還すべきであろう。殊に

：然れども 谷片付きて 家居有 君が聞きつつ 告げなくも
憂し (19・四二〇七)

この「イヘキセル」は西陽文矢の諸本に「セル」を青書していることからこれが仙覚の新店であることが分かるが、元緒冷に「イヘキセル」とあり、いずれにしてもそのサ変複合形式が古い訓み方であったと知られる。しかるに古義が「イヘヨレル」と読んで以後それが文学に忠実な訓み方と考えられている。中にアリを内蔵しているはずのラ変動詞居りに更にアリが付くことがあり得ようか。このことから、先の「宿」一字をヤドリスと読むことの必ずしも不合理でないことが知られよう。

四

以上挙げたものは、寛永版本に付せられた狭義の旧訓について、従うに足るものと思われる訓の再検討であったが、その寛永本では歪められており、むしろそれ以前の何れかの古写本の訓を仮に広義の旧訓と呼ぶならば、それをもまた顧みるべきものと見なして採ろうというのが以下の場合である。

春山の霧に迷へる鶯も我にまさりて物念(10・一八九二)

この「モノオモホメヤ」は冷泉本と西矢京(陽はこの前後散佚)が同じく、夫木抄も亦この通りである。ところが、元暦校本と紀州本には「ものおもふらむや」とあり、古今六帖がそれと一致する。これでも反語と解せなくもないが、この際万葉集の訓として最もふさわしいのは類聚古集の「ものおもふらめや」であろう。ラメヤ(モ)は「眠も寝らめやも」(四六)「孫星も我にまさりて思ふ良米也母」(三六五七)「紐解き放けて思はず良米也」(三九四九)などの例があり、東歌では「漕ぐ良米可母与」(三四三〇)という形ともなっている。古今集にも「妹知るらめや」(四八五)などの例がある。

先の万葉歌の場合に内容的にも格別に近いと思われるのは

あしひきの山したとよみ鳴く鳥もわがごとたえず物思ふらめや
(後撰 一三〇〇)

であろう。

意味の上から大別して推量の助動詞ラムに二種類あり、一つは上接動詞について現在推量するそれだが、もう一つは原因理由に関する話し手の疑問を表すものであることは知られている。しかし実際には、前者でも疑問が絡む場合しばしば後者と区別が付かないことがある。またムでも、「山からや見我保之加良武」(三九八五)のような後者のラムと意味用法が近い例が時にあることも一因となっているのであろうが、前者の現在推量と解すべき場合でありながら

「將」字で表されたものを、ムとのみ読むことが中古末期以来殊に
仙覺の新点において多くなる。一つには句中に単母音音節があつて
も、それを含めた五・七の定数音句に読もうとする、モーラ尊重の
傾向が固まり行くことも原因因していよう。

そのために、

鴨山の岩根し枕ける吾をかも知らにと妹之待乍將有

(2・二二三)

；親ましみ 吾は思はず 草枕 旅を宜しと 思ひつつ 公將
有跡 (4・五四三。文永本系諸本「アラム」を寄書)

この月のここに来れば今とかも妹之出で立ち待乍將有

(7・一〇七八)

奈奥の海の朝明のなごり今日もかも磯の浦回に乱而將有

(7・一一五五)

吾のみやかく恋すらむかきつはた丹つらふ妹は如何將有

一九八六。元「いかにあらむ」紀宮細西「イカニカアラム」

いささめに今も見てしか秋はぎの擔ひに將有妹が光儀を

(10・二二八四)

大夫は友の騒きに慰もる心も將有我を苦しき

(11・二五七一)

行かぬ我来むとか夜も門鎖さずあはれ我妹子待ちつつ

(11・二五九四)

これらの「將有」「在」を、今もなおアラムと読んでいる注釈書が
あるが、

群きもの心擡けてかくばかり我が恋ふらくを不知番安流良武

(4・七二〇)

春雨のしくしく降るに高田の山の桜は何如有良武

(8・一四四〇)

などや、先に係ヤ・カ・ノ・ガと続く例に挙げた「團にや妹が古非
都追安流良卒」(三六六九)に合わせてアルラムと読むべきであろ
う。

以上述べたことから推して、先の「驚も我にまさりて物念」(一
八九二)の第五句の訓は、後撰集の「わがごと絶えず物思ふらめや」
の例もあることだし、類聚古集の訓「ものおもふらめや」に戻すべ
きである。稿本などで「ものおもはめや」とモを加えて八音にし
たのは旧訓の準不足音を避けるための苦肉の策であつたが、考えが
足りなかつたと反省する。

五

水底に生ふる玉藻の生不出よしこの頃はかくて通はむ

(11・二七七八)

この第三句には、嘉暦伝承本から類聚古集、仙覚寛元本の官細、同文永本（仮名遣いに多少小異あり）の西紀陽までの「オヒモイテス」とすると、冷泉本と古葉の「オヒイテス」とするのととの二種の訓があった。それがいかなるわけか矢京で「オヒイテス」となり、寛永版本がそれを受けるのだが、今はそれについては触れない。代匠記が「オヒモ…」としたのは幽齋本の訓に従ったのだという。

その後略解が五音の「オヒイテズ」としたのが長く行われ、稿本・全集本・集成本もそのままであった。ただ桜楓社版本が「おひはいです」としているのは旧習を破った点で注目される。完訳本で嘉暦以来の「おひもいず」に選した。それについて私なりの遅れ馳せの裏書をおきたい。

複合動詞の下にズを始めとする打消し表現が来る連語で、中間にモが割り込むという形は、

承りもてぬやうにてなむまかで待りぬる（源氏・桐壺）

山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬもみぢなりけり

（古今 三〇三）

など例示する必要もないばかりに多いが、今は散文や、歌でも音数制限に抵触しない場合については措こう。

問題があるのは下位動詞がアイウエオで始まり、モなどの助詞がなかったら準不足音になる場合であり、このような場合私の知る限

りまず必ずと言ってよいほどにモが入る。仮にアヘズを例としていえば次の如くである。

さかさまに年もゆかなんとりもあへず過ぐるよはひやともにかへると
（古今 八九六）

しぐれ降り降りなば人に見せもあへず散りなば惜しみ折れる秋

萩
（後撰 二九七）

消えもあへずはかなきほどの露ばかりありやなしやと人のとへかし
（後拾遺 一〇一三）

さればこそ万葉でも、長歌ではあるが、

…人の寝る 味眠は寝ずに 大船の ゆくらゆくらに 思ひつ
つ 我が寝る夜らは 数物不敢鴨
（13・三三二九）

の最後の一句は「よみもあへぬかも」と読む他ないように仮名「物」が書いてある。そのような仮名が表記されていなくても

袴領巾の白浜浪の不肯縁荒ふる妹に恋ひつつそ居る

（11・二八二二）

の第三句は「ヨリモアヘス」の旧訓が今もなお大抵の注釈書に行われている。然らば

山河に答を伏せて不肯盛年の八歳を我が竊まひし

（11・二八三二）

の第三句も「もりもあへず」と読むべきだと思われるのに、代初

「モリアヘス」(西本願寺本にも「モリアヘヌ」とあり)の訓がかなり一般的に採られているのはどうしたことか。

これらのことから考えて、この「生不出」(二七七八)も亦「オヒモイデズ」と読むべきだと思われる。その際先に示したように桜楓社版本に「おひはいです」と読んでいるが、実のところこれを斥けるべき決定的な根拠を私は持ち合わせていない。なんとすれば、複合動詞ではないが、

石上振の早田の穂尔波不出心の内に恋ふるこの頃

(9・一七六八)

言に出でて言はばゆゆしみ朝貌の穂庭開不出恋もするかも

(10・二二七五)

などのようにハヰズという呼応例もあるからである。

ただこれらは、おくびにも出さず、というような全面否定ではなく、表面に出さないだけで裏面では秘かに思いつけている、というような部分否定であり、相互に別個の表現ではないか、と私は思っている。と言うのも、「穂には出でず」と似てやや異なるものに、

黄葉に置く白露の色葉二毛不出と思へば言の繁けく

(10・二三〇七)

のモヰジという表現がある。これはズ・ジの違いもあろうが、それこそおくびにも出さまいという全面否定的決意を表していると思わ

れる。同じ様に、

志賀の海女は軍布刈り塩焼き暇無み櫛奇の小櫛取毛不見尔

(3・二七八)

天雲も 行き憚り 飛ぶ鳥も 翔毛不上(3・三一九)

などのモヰ打消しも亦内容から見ても全面否定と考えられ、やはり「穂には出でず」の類とは同列に扱えないもののように思われる。

この辺りモとハとの差についても更に多角的な調査が必要であろうで、それ故に「おひはいです」という訓を不適當と断ぜられないのである。

いずれにせよ、先の「生不出」は「オヒモイデズ」という、全古写本中恐らく古点を最も多く伝えていると私が睨んでいる嘉暦伝承本以来の訓が尊重されるべきだ、と信ずる。

おわりに

以上取り上げた問題は瑣末にわたり、またそれぞれの間に相互の関連はないが、万葉集古写本の訓が、後世の研究者たちがそれなりに努力して改めたものよりも、案外に万葉時代の歌ことばに合致するところが多い、と私は思っている。近世よりも中世、中古、と少しでも時代を遡るほど上代の人々の生のことばに近くなる。音韻面でも清濁などなまじな賢しら語源説を振りかざすよりも日葡辞書や類

聚名義抄などについて見る方が正しい接近法である。語法に關しても、万葉時代の空白部を中古の歌文、特に古写本の訓を再検討することによって埋める作業を試みたい。

ただその広義でいう旧訓のどの部分が古い姿を留めているか、どこが歪められているか、の判定が難しいところに、この方法の壁があるようである。

注(四ページ下段)

佐伯梅友博士が、ゾ・コソの係の場合でも又主語がノ・ガを受けると言われ、

嘆きつつますらをのこの恋礼許曾わが髮結乃瀆ちてぬれけれ

(2・一一八)

多摩川にさらす手作りさらさらに奈仁曾この児乃ここだかなしき

(14・三三七三)

夕さればひぐらし来鳴く生駒山越えて曾安我久流妹が目を欲り

(15・三五八九)

の三首を例に示されている。係結の機能からいってそれらはいずれも当然で好都合で明快な例歌と言つてよい。博士は挙げられていないが、ナモ(ナム)についても亦、

また勅はく、神等をば三宝より離けて、不触物曾止素毛人能念天

在

の、ナモノの例を拾うことができる。

しかし、広く実際を見るならば、必ずしもその通りでないことに気付く。即ち、コソノは博士の挙げられた「わが髮結乃」の一例だけで、コソノハが九例ある。

詔らせ許曾志斐い波奏せ

(3・二三七)

昨日社公者在りしか

(3・四四四)

詔し己曾吾大王者定めけらしも

(6・一〇五〇)

昨日社年者果てしか

(10・一八四三)

うべし社籬の下の雪者消すけれ

(10・二三一六)

吾背子に直に相者社名者立ため

(11・二五二四)

刈りに社吾をば公者念ひたりけれ

(11・二七六六)

最も今社恋者為便なき

(11・二七八一)

死ぬれ社海者潮干て山者枯れすれ

(16・三八五二)

この事実から考えてコソの係機能は実際には案外に弱かつたのではないかと思われて来る。

その点ゾが係の場合確かにノ・ガが現れ易く、博士の示された

「この児の」「我が来る」の二例の他に

うれむ曾此之よみがへりなむ

(3・三三七)

待ちし夜のなごり其今も眠ねぬ夜乃多き

(12・二九四五)

かくして曾人之死ぬといふ (12・三〇七五)

奥つ真鴨の嘆き曾安我須流 (14・三五二四)

奈尔須礼曾母とふ花乃咲き出来ずけむ (20・四三三三)

など多く、殊に「念ひそ吾がする」「念ひそ吾がせし」は常用され、

ソノ・ガは合計一九例を算する。

ところが、これにも全く同数の一九例の異例を見る。

時無く曾雪者降りける間無く曾両者降りける (1・二五)

真白に衣不尽の高嶺に雪波降りける (3・三一八)

恋にも曾人者死にする (4・五九八)

容艶寄りて曾妹者たはれてありける (9・一七三八)

間なき恋に曾年波経にける (18・四〇三三)

中には

求むと曾 君之来まさぬ 拾ふと曾 公者来まさぬ…あらむと

曾 君者聞こししな恋ひそ吾妹 (13・三三一八)

のように正用誤用混在の例もある。

古今集でも同じようなことが指摘できる。

秋の露色ことに置けばこそ山の木の葉の千種なるらめ

(二五九)

青柳の糸よりかくる春しもぞ乱れて花のほころびにける

(二六)

は正格の例であり、

底ひなき淵やはさわく山河の浅き瀬にこそあだ浪は立て

(七二二)

冬ながら春のとなりの近ければ中垣よりぞ花は散りける

(二〇二二)

は異例ということになる。

ことばはなかなか理論通りに実際には話されていない、ということの一例ではなからうか。

(平成三年九月一五日)